

徒然なるままに その二

平成 30 年 11 月 5 日記

本ホームページの「ひげぐま先生のひとりごと」に書いたもので、本コーナーの趣旨に合うものを、一部修正してこちらにも掲載します。

佐藤直美氏は、著書「不登校・引きこもり脱出レポート」でこう書かれておられます。「特に小さい子供にとっての世界は家庭が全てです。殆どのことは親や兄弟から学ぶしかありません。・・・もし、親が仕事で疲れ、人間関係で悩み、疲れて帰ってくるのを毎日見ていたとしたら・・・きっと子供は『外の世界ってなんてひどいところなんだろう、そんな怖いところは絶対に行きたくない』そんな風を感じてしまうかもしれません。そして、その間違っただけの思い込みは、子供のその後の価値観に、大きな影響を与えるのではないのでしょうか。だからこそ私たち大人は、自分の人生を自分らしく楽しく生きて、『外の世界は素晴らしくて、人間もみんないい人よ、だからこれからも良い事がいっぱい起きるわよ』ということを感じさせてあげなければいけないと思うのです。」

”三つ子の魂百まで”と言います通り、子供がこの世に生をもうけてから先ずは家族から、あるいは身の回りに起こったことから人生脚本の筋書きの元が形成されます。ご存じの通り、子供が「自分は親にとって大切な存在なんだ」と感じるほどの親のたっぷりとした愛情が親子の信頼関係を築き、子供の自信を育て、他人との信頼関係を築く基礎が出来上がります。また、氏が書かれたように、家族からあるいは身の回りの様子から自身の価値観、人間観、人生観の基礎ができてきます。例えば、友達や近所付き合いが全くない親の子供は、人間関係構築の術を学べず、当然にスムーズな”公園デビュー”（最近はこのもないそうですが）を果たせないでしょう。また、ご両親とも無口で内向的な生活をしていれば、その子供もそうした生活しか学べず同様な生活を送るでしょう。勿論、そうした観念から子供は、それぞれに感じ、それぞれに考え、それぞれに行動していくものと思います。

私達が実施しております交流合宿などで感動的な同世代の仲間達との出会いを体験すると、氏の言葉を借りれば、『外の世界は素晴らしくて、人間もみんないい人よ、だからこれからも良い事がいっぱい起きるわよ』と言われることを実感し、不登校、引きこもりの解消に繋がっていったと思います。